

## 2-4.岡崎城下の三大祭りにみる歴史的風致

### (1)はじめに

本市の中心市街地は、江戸時代の岡崎城の城下町と東海道の宿場町岡崎宿が母体となっている。東海道と矢作川水運による物資流通及び交通の要衝として発展し、西三河地方の政治・経済の中心であった。太平洋戦争の空襲により市街地の大部分が焼失したが、大規模な復興事業によって現在の市街地の原型が形づくられ、戦後も西三河の中心地としての地位を継承し続けた。

菅生祭、岡崎天満宮例大祭、能見神明宮大祭の「岡崎三大祭り」は、江戸時代の町割りの一部や寺社の境内がそのまま残る旧岡崎城下を舞台に、地域の人々が大切に守り続け、形を変えつつも毎年行われている。

表2-4-1 小風致の概要

小風致	建造物	活動
菅生祭にみる歴史的風致	菅生神社	菅生祭
岡崎天満宮例大祭にみる歴史的風致	岡崎天満宮	岡崎天満宮例大祭
能見神明宮大祭にみる歴史的風致	能見神明宮	能見神明宮大祭

### (2)岡崎城下と城下の祭り

#### ①岡崎城下

江戸時代の岡崎は、神君家康公の生誕の地、歴代譜代大名の城下町であると同時に、東海道五十三次の38番目の宿場町、また矢作川水運の基地として、賑わいを見せていた。

岡崎城下を通る東海道は屈折の多さで知られ、世に「二十七曲り<sup>1)</sup>」と呼ばれている。二十七曲りは、延享2年(1745)の『東海道巡見記』には「宿町数五十四町、廿七曲りと云ふ。」とあり、町数<sup>2)</sup>とともに岡崎の町の特色を端的に表すものとして用いられている。東海道有数の宿場町でもある岡崎城下町は、寛文から元禄期頃までの江戸中期に東海道往還に面した町や周辺の町など合わせて領主支配の19町で成立していた。まちなみは東から西へと城内を経て連なり、19町のうち東海道沿いの町数は、投町(現在の若宮町)・両町・伝馬町(現在の伝馬通)・籠田町・連尺町(現在の連尺通・本町通)・材木町・下肴町(現在の魚町)・田町・板屋町・松葉町(現在の八帖町・八丁町・中岡崎町)の10町で、それらの町なかを通る東海道

<sup>1)</sup> 天正18年(1590)岡崎に入城した田中吉政は東海道を城下町に通した。その際、城下の道を防衛の必要性から屈折の多い道とした。また、江戸時代初期の本多家の整備により、城北へ大きく迂回され、城までの距離を伸ばすことで間道を利用して防衛することができた。

<sup>2)</sup> 町(ちょう)=60間=約108メートルの長さ。

の長さは合計で 36 町 51 間(約 4 キロメートル)もあり、東海道各宿の中で最も長いといわれる。

往還周辺の町数は、十王町・久右衛門小路町(現在の久右衛門町)・裏町(現在の<sup>みかげ</sup>花崗町<sup>かみ</sup>)・上肴町(現在の<sup>さかな</sup>花崗町<sup>こうざん</sup>・<sup>ゆうきん</sup>伝馬通)・六地藏町・唐沢町・祐金町・横町(現在の<sup>ほん</sup>本町通)・能見町(現在の<sup>のぞみ</sup>能見町<sup>のぞみ</sup>・<sup>のぞみ</sup>能見通<sup>のぞみ</sup>・<sup>のぞみ</sup>東能見町)の 9 町である。近世岡崎城下町はこれら城下町廻り 19 町と城主支配外の<sup>こうざん</sup>甲山寺<sup>じ</sup>、<sup>そうじ</sup>大林寺<sup>に</sup>・<sup>じ</sup>・<sup>しょう</sup>松應寺<sup>おう</sup>・<sup>じ</sup>・<sup>まん</sup>満性寺<sup>しょう</sup>・<sup>じ</sup>・<sup>ずい</sup>隨念寺<sup>ねん</sup>・<sup>じ</sup>・<sup>ごく</sup>極楽寺<sup>らく</sup>など<sup>しゅう</sup>大小の朱印寺門前町が複雑に入り組んで構成されてきた。

天保末の『<sup>しゆく</sup>宿村大概帳<sup>たいがい</sup>』によれば本陣・脇本陣数は各 3 軒の計 6 軒で、これは小田原の 8 軒、箱根の 7 軒に続いて浜松・桑名とともに 3 番目の多さである。また一般旅行者のための<sup>はたご</sup>旅籠屋<sup>や</sup>は 112 軒で、これも<sup>みや</sup>宮(現在の<sup>なご</sup>名古屋市熱田区)の 248 軒、桑名の 120 軒に続いて 3 番目の多さである。以上の事実からも、岡崎宿は宿場町として東海道往来の重要な拠点の一つとして大きな役割を果たすとともに大きな賑わいをみせていたことがわかる。

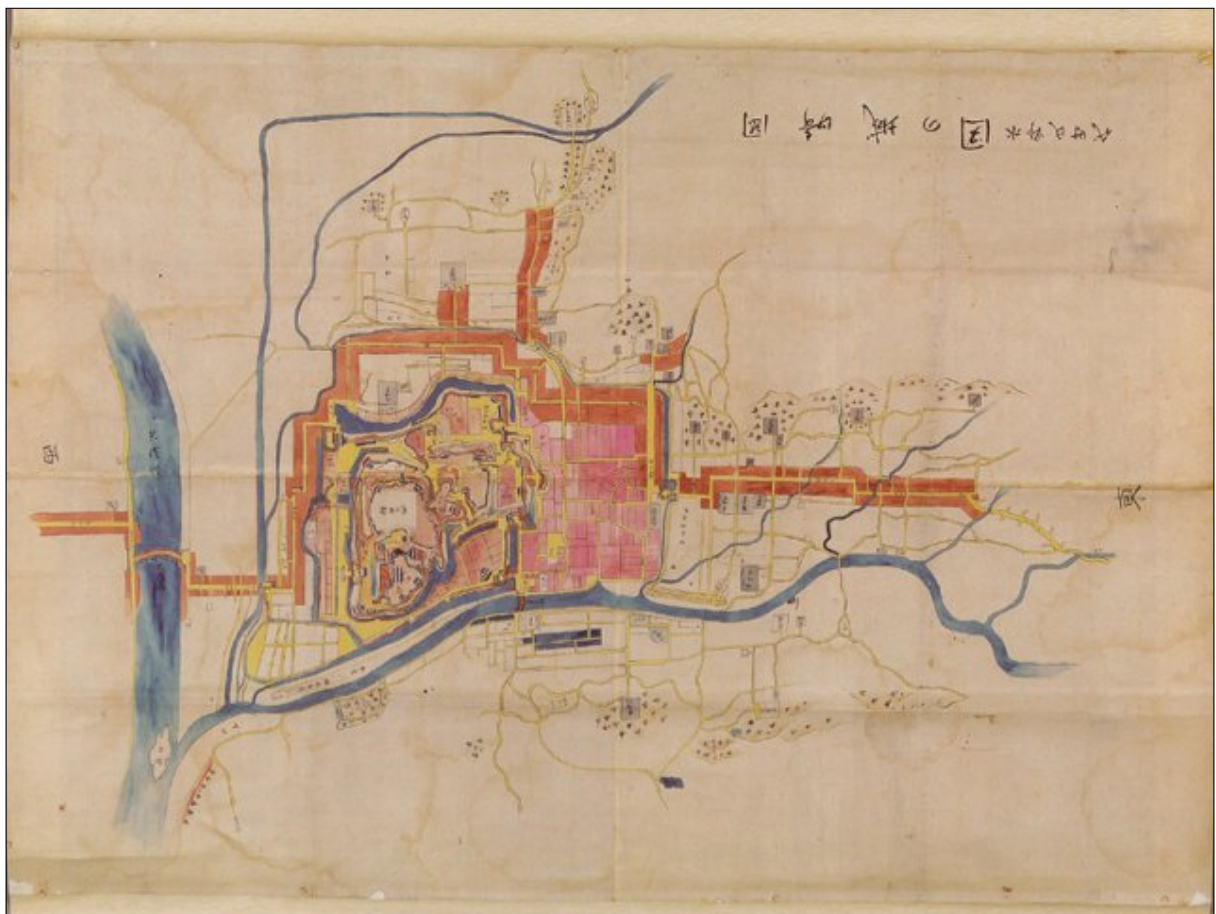


図2-4-1 水野氏時代の岡崎城図(正保2年(1645)～宝暦12年(1762))

## ②岡崎城下の祭り

東海道有数の宿場町として栄えた岡崎城下は、その経済力や街道の往来によりもたらされた文化等により、城下の発展とともに民衆の力も蓄積され、江戸時代後期には町が実質的なまとまりとなり、産土神<sup>3</sup>や氏神<sup>3</sup>の神事や祭礼に合わせて華やかな祭りが行われるなど、次第に祭礼行事が興隆し、形態を変容させながら現在に受け継がれている。

江戸時代の庶民の楽しみは何といても祭りであった。岡崎城下では、主要な祭りとして、菅生天王社（現在の菅生神社）、北野天神（現在の岡崎天満宮）及び能見神明宮の三大祭りが有名で、それぞれの氏子<sup>4</sup>が競って祭りを盛り上げた。当初は例祭日に神事が行われるのみであったが、江戸時代中期頃になると、東海地方で神輿や山車の巡行や、からくり・人形芝居・手踊りなどが盛んに行われるようになり、岡崎城下でも各神社が取り込んでいったとされる。江戸時代後期になると、花火奉納や派手な祭礼行列が定着するようになっていった。

こうして江戸時代後期には、城下でも大きな神社であった菅生天王社と北野天神、能見神明宮において、氏子が主役となって参加する形が生まれ、内容も創作性に富み、地域生活に根ざした祭りとなった。そしてこれらは武家、町人の身分的な枠を越えて共有され、両者に支えられることとなる。

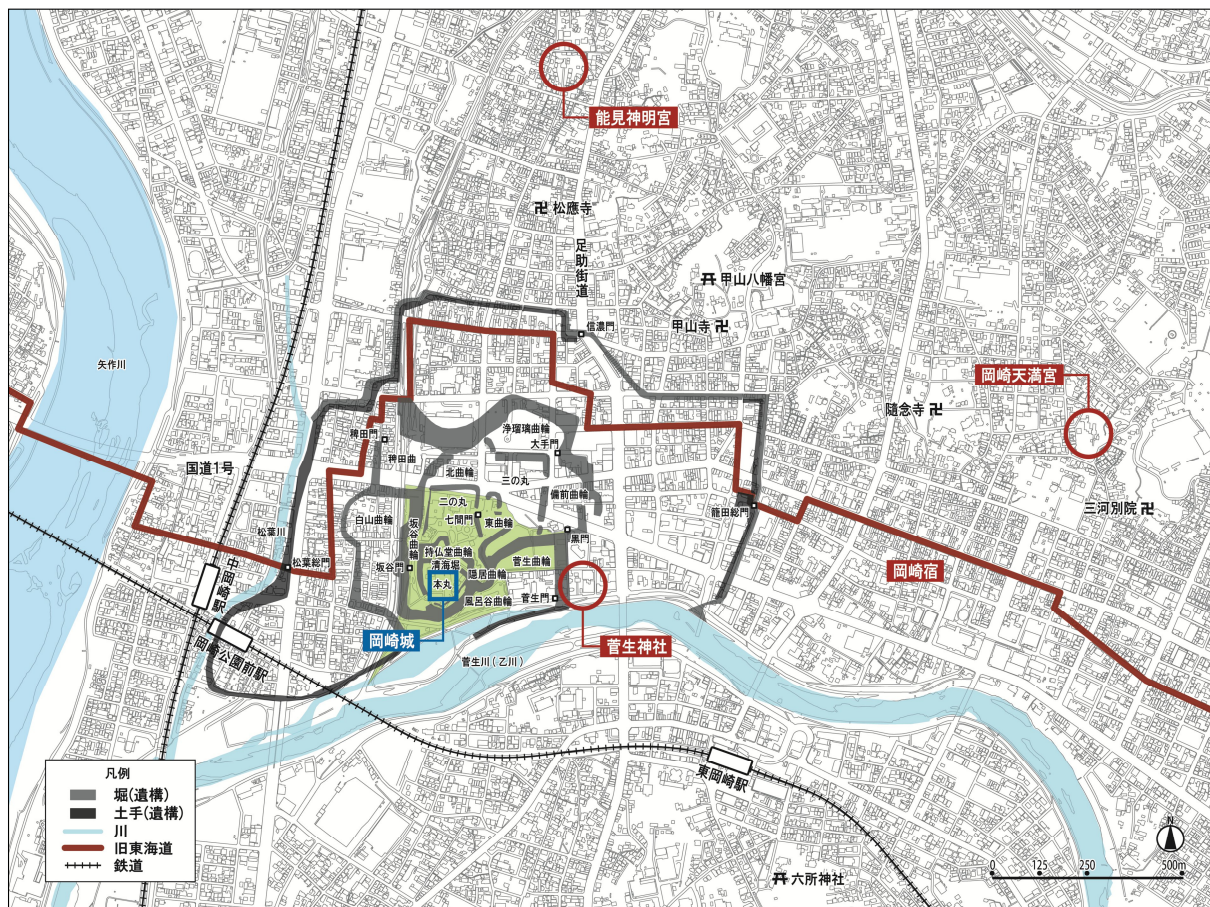


図2-4-2 岡崎城下と関連寺社等の位置図

<sup>3</sup> 江戸時代後期では、町・村全体を守護してくれる神を産土神・氏神とも呼んだ。

<sup>4</sup> 産土神・氏神の町民・村民を氏子と呼んだ。

### (3) 菅生祭にみる歴史的風致

#### ①はじめに

菅生祭では、7月19日の宵宮祭よひみやさい、20日の例大祭、8月第1土曜日の銚船神事ほこぶねしんじ・奉納花火の3つの祭事が行われており、銚船神事・奉納花火は、岡崎の夏の風物詩として親しまれている。

#### ②建造物

##### ア.菅生神社

社伝によれば、日本武尊やまとたけるのみことが菅生の地を通過した際、高石たかいわ(現在の菅生町)に伊勢大神を勧請し、吹矢大明神と称した。菅生神社が岡崎市最古の神社といわれるのはこの言い伝えをもとにする。永禄9年(1566)家康公が社殿を再建。その後、岡崎城内の当時の殿橋(菅生橋)の東側の地に移転し、歴代岡崎城主の崇敬を受けた城下の総鎮守となった。別名、菅生天王社。現在の本殿は明治27年(1894)、拝殿は明治38年(1905)に建てられたものである。本殿は、木造平屋建、入母屋造いりもやづくり、棧瓦葺さんかわらぶきで、拝殿は、木造平屋建、切妻造きりまづくり、棧瓦葺である。昭和31年(1956)の写真には、現在と同一の社殿が写っており、その部材も相応に古いことから、昭和31年当時と同じ社殿と推測される。

祭神は、天照皇大神あまてらすおおみかみ、豊受姫命とようけひめのみこと、須佐之男命すさののおみこと、徳川家康公、菅原道真。



図2-4-3 菅生神社の境内



図2-4-4 菅生神社(昭和31年(1956))

#### ③活動

##### ア.菅生祭

##### a.菅生祭の歴史

厄災の除去を祈願した祭礼で、宝暦8年(1758)の『菅生天王宮年中行事』によれば、葦で作った8束の「疫柄やくがら」に疫神を負わせて流すというもので、疫病退散の厳粛な神事が中心であった。ところが、津島や吉田(豊橋市)の天王祭りの影響を受けたのか、文政5年(1822)の記録によれば、菅生川(乙川)に提灯を付けた銚船ほこぶねが出され、管弦を奏し、船中から金魚花火<sup>5</sup>

<sup>5</sup> 水上に浮かび金魚が泳ぐように動く花火。川の流れを火の流れと化し観衆を魅了したと伝えられている。

や手筒花火が奉納されるようになり、壮麗で賑やかな祭りに変化した。この背景には、城下における花火技術の拡がりがあった。文政元年(1818)には藩主上覧の花火大会が行われ、これには菅生町を始めとする城下各町がそれぞれ打ち上げを行っており、城下町の住民たちも花火の技術を習得していたことがうかがえる。大正11年(1922)の木版画にも、現在の祭りと変わらぬ様子が描かれている。江戸時代の例祭日は6月15日・16日であったが、現在は7月19日に「宵宮祭」、20日に「例大祭」、8月第1土曜日に「銚船神事・奉納花火」の3つの祭事が執り行われている。「銚船神事・奉納花火」は、昭和23年(1948)から「岡崎市観光夏祭り(平成26年(2014)度より岡崎城下家康公夏まつり)」の花火大会との共催(合同開催)で行われ、岡崎の夏祭りとして市民はもとより、近郷近在から多くの見物客が集まる祭りとなっている。



図2-4-5 銚船からの奉納花火(大正11年(1922))



図2-4-6 銚船での神事

### b.現在の菅生祭

炎天の下、菅生町・本町連・康生連・祐金町・六地蔵町・籠田町の各町からは氏子衆が長持ち唄を歌い、威勢よく足を蹴上げながら神社まで、花火玉の長持ちを担いで練り込み行列する。先導を先頭に高張提灯と大うちわ、大人用の長持ちに小型の子供用長持ちが並び氏子が続く。行列は岡崎城総構え<sup>6</sup>の東端にあたる中央緑道を出発し菅生川(乙川)沿いを進む。



図2-4-7 長持ち行列の練り込み

<sup>6</sup> 城のほか城下町一帯も含めて外周を堀や土塁、石垣で囲い込んだ日本の城郭構造をいう。

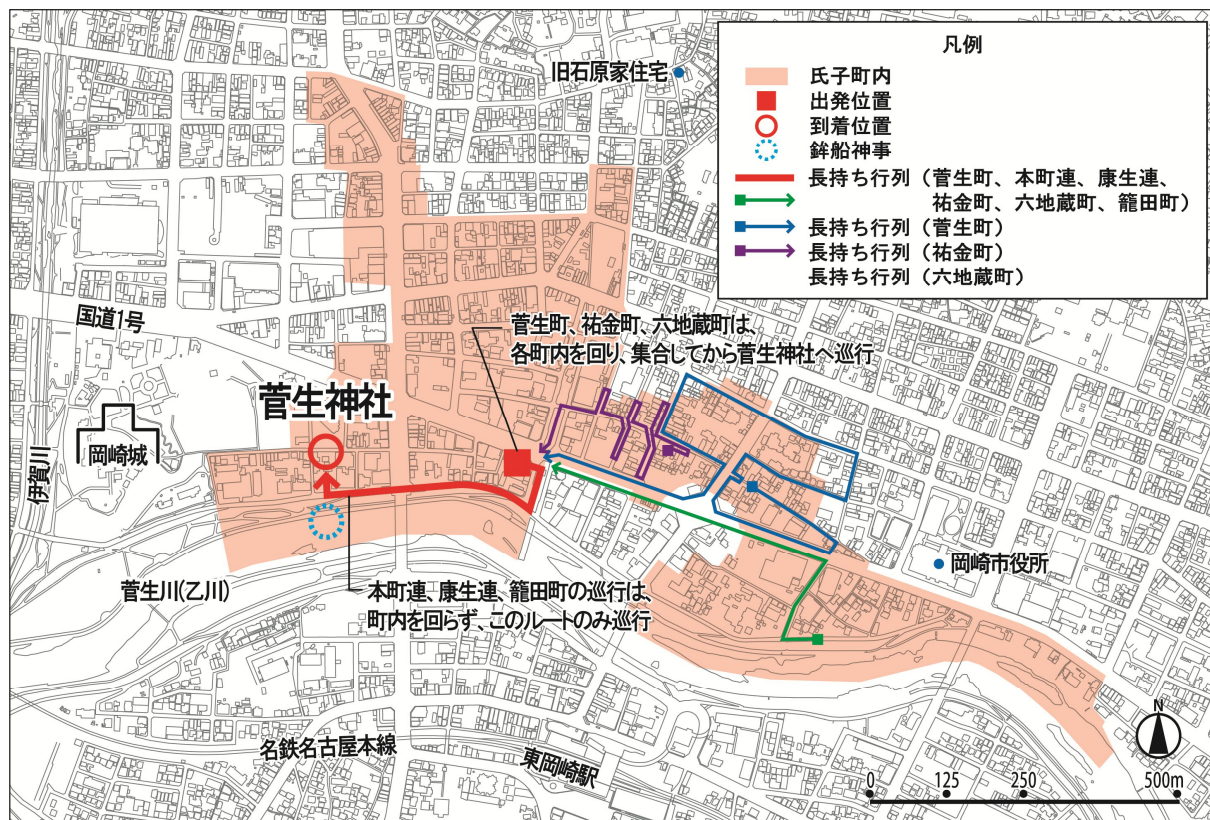


図2-4-8 菅生祭 氏子衆による長持ち行列巡行図

神社へ到着すると、神前に奉納者が3名並び、手筒花火を奉納する。本殿での神事が午後2時に開始。次に午後2時30分、花火観覧のための桟敷が敷かれた河原に面して浮かべられた2艘の銚船、天王丸・菅生丸に宮司らが分乗し、安全を祈願する「船魂祭」が行われ、宮司の祝詞に続き、「銚船神事」が始まる。これは船上から葦で編んだ舟形の中に人形、神葎を乗せ、菅生川(乙川)に流し、疫神を流すという御霊会ごりょうえの儀式を伝える神事である。午後3時30分、神前にて奉納手筒花火が行われる。宵闇の頃午後7時には、船上の提灯塔に一年の月数を表す12個の提灯を立て並べ、下方に傘状に一年の日数365個の提灯を点じた天王丸・菅生丸より手筒花火を打ち上げ、金魚花火を奉納する。現在でもこのように古礼に基づき、儀礼や祭礼が執り行われ続けている。



図2-4-9 銚船に乗る様子(令和6年(2024)8月3日)



図2-4-10 銚船神事(神葎流し)

#### ④まとめ

岡崎城天守を背景に夜空を染める打ち上げ花火と、鉾船を照らし川面に映る金魚花火・手筒花火は、美しく風格ある景観であり、岡崎の夏の風物詩としての風情が感じられる。



図2-4-11 岡崎城天守を背景に菅生川(乙川)に浮かぶ鉾船と打ち上げ花火(令和6年(2024)8月)

## (4)岡崎天満宮例大祭にみる歴史的風致

### ①はじめに

岡崎天満宮例大祭は、式月式日である9月23日から25日に齋行<sup>さいこう</sup>され、長持ちを担いだ練り込み行列や奉納花火が行われており、歴史や伝統を感じ伝える祭礼である。

### ②建造物

#### A.岡崎天満宮

元は総持尼寺の鬼門除けとして道臣<sup>みちのおみのみこと</sup>命を勧請し、古くは北野天神、弓弦天神、伴天神と称した。元禄3年(1690)、菅原道真を合祀して岡崎天満宮に改め、東海道岡崎宿の総鎮守として崇敬を受けた。社殿は、昭和20年(1945)に戦災で焼失したが、その後再建された。現在の本殿は、木造平屋建、入母屋造、棧瓦葺で、昭和33年(1958)に建てられ、拝殿は、昭和45年(1970)に建てられた。拝殿竣工時の奉祝祭後の写真が残されており、部材も相応に古く、昭和45年(1970)の建築時のものと推測される。祭神は菅原道真・道臣命。



図2-4-12 岡崎天満宮(昭和45年(1970)3月25日)

### ③活動

#### A.岡崎天満宮例大祭

##### a.岡崎天満宮例大祭の歴史

元は東海道岡崎宿の伝馬町を中心に行われた祭礼で、氏子は城下の大半を占め、祭礼は盛大であった。古き伝統を守り、祭礼日を変更せず、式月式日に齋行している。文政6年(1823)の『御祭礼警護行列帳』<sup>ごさいれいけいごぎょうれつちよう</sup>によれば、神輿や花笠山車・子供の手踊り等の行列が行われたとある。安政4年(1857)には藩主本多忠民<sup>ただもとごちそうやしき</sup>が御馳走屋敷<sup>ごちそうやしき</sup>7で見物した。同様の内容が、安政4年(1857)の『万留書覚帳』<sup>まんろかきおぼえちよう</sup>にも記されており、大人の手踊りが29番もあるなど、より派手になっている。その

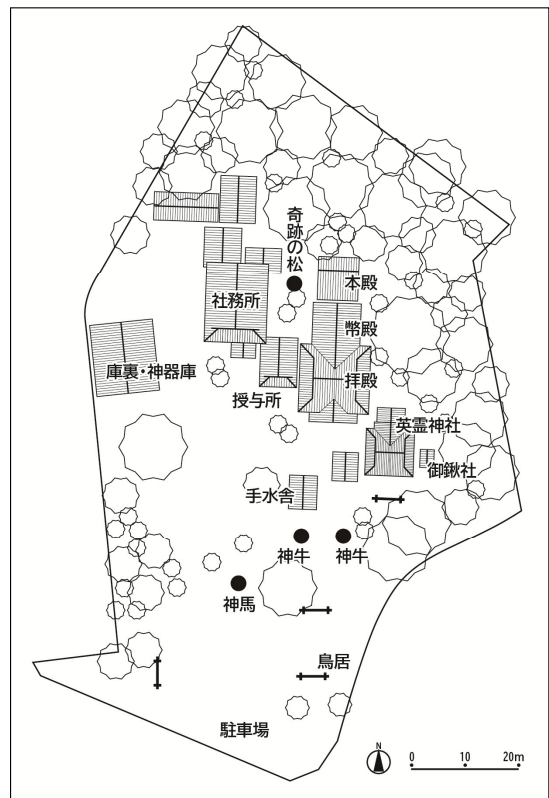


図2-4-13 岡崎天満宮境内図

<sup>7</sup> 御馳走とは接待を意味し、屋敷は公用の役人等をもてなす、岡崎藩の迎賓館的な役割を持っていた。

後、江戸時代後期には、奉納花火も上げられるようになり、特に昼間の打上花火は有名で、「菅生さんの川花火、天神さんの丘花火」として知られていた。町内ごとに、だるま、将棋の駒、番傘など、特徴的な役物が打ち上げられたという。戦災後は、大規模な花火は民家の密集により休止されている。



図2-4-14 岡崎天満宮の境内

### b.現在の岡崎天満宮例大祭

毎年9月23日から25日に齋行さいこうされる例大祭では、氏子衆が長持ち唄を歌いながら、天満宮まで長持ちを担ぎ練り込み行列する。以前は、氏子の一部の両町、中大門・中天神・東中(以上、中町)が行っていたが、現在は、両町・中大門のみで続けられている。長持ち唄はどの町も基本的に同じ唄を踊りながら歌うが、イントネーションや細かい歌詞が町ごとに違う。

かつては筒場(現在の梅園公園辺り)があり、大規模な打ち上げ花火が上げられていたが、市街化に伴って行われなくなった。その後、各町で手筒花火が上げられていたが、平成15年(2003)頃からは、唯一、中大門のみが、天満宮境内で手筒花火を上げている。



図2-4-16 岡崎天満宮の手筒花火



図2-4-15 長持ち行列の練り込み

### ④まとめ

岡崎天満宮例大祭は、形を変えつつも現在まで受け継がれる貴重な祭礼である。寺社の門前や旧東海道など古くからの道筋を舞台に行われる練り込み行列や、岡崎天満宮を背景に奉納花火が上げられる様は、往時の風情を偲ぶことができるとともに、境内の南に広がる東海道岡崎宿であった市街地に思いを馳せることができ、歴史や伝統が感じられる。

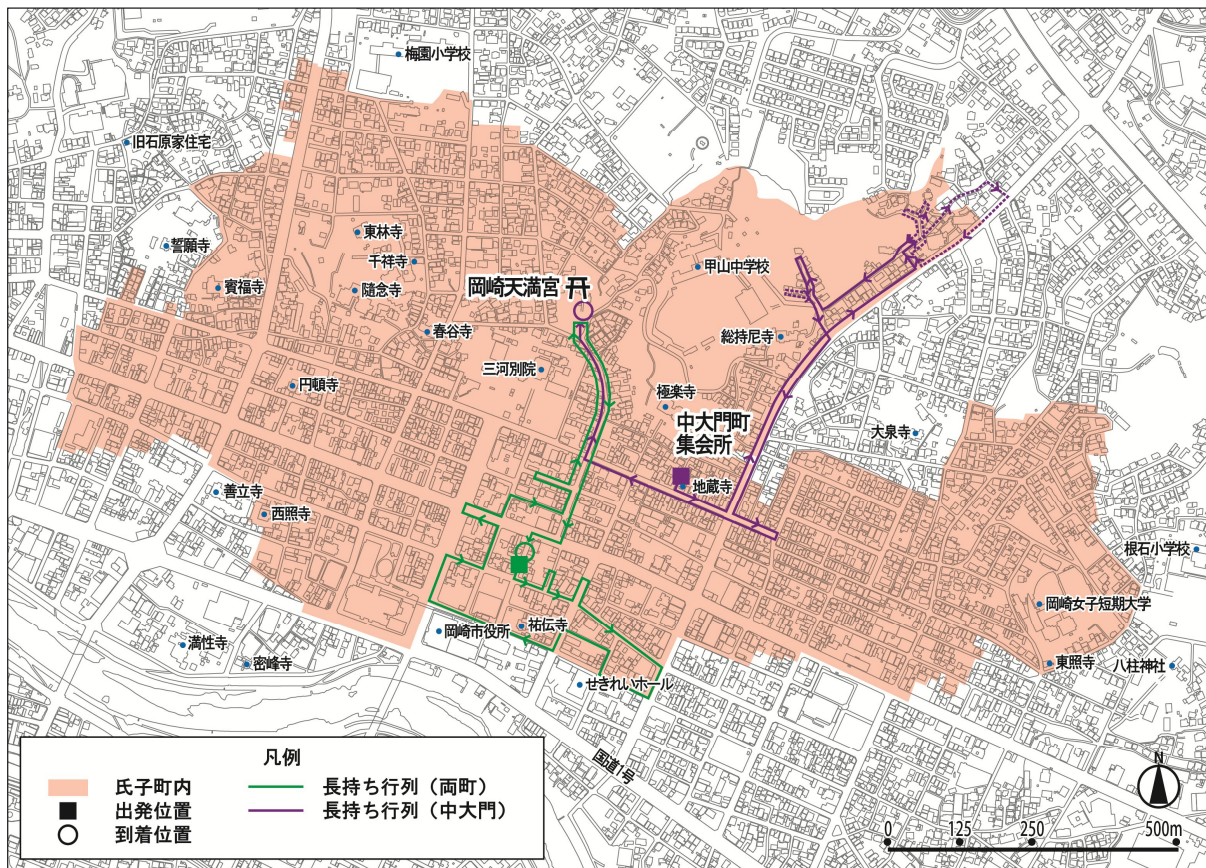


図2-4-17 岡崎天満宮例大祭の長持ち行列巡行図

## (5) 能見神明宮大祭にみる歴史的風致

### ①はじめに

能見神明宮大祭は、5月第2日曜日及びその前日、翌日に行われ、御神輿渡御や山車の曳き廻しを特徴とする祭礼であり、岡崎城下の風情と岡崎の町人文化の伝統を今に伝えている。

### ②建造物

#### ア.能見神明宮

社伝によれば、創建は平安時代中期とされ、伝承によると、天正18年(1590)に田中吉政が岡崎城主になって城地拡大を行った際に、材木町久後にあった稲前神社(現在は稲熊町へ移転)を、この地に移転再興したといわれている。

明治3年(1870)の『神社取調帳』によれば、寛延2年(1749)に社殿を再建している。『神明宮社寺記録』(明治29年(1896)～大正14年(1925))によると、明治42年(1909)には拝殿が改築され、大正13年(1924)には神殿、神楽殿、石鳥居等が建立されている。拝殿は間口3間(約5.4メートル)、奥行3間(約5.4メートル)、本殿が間口1間(約1.8メートル)、奥行1間(約1.8メートル)で、いずれも切妻造、銅板葺とし、棟に千木・鰹木、破風に鞭懸を備えた神明造とされ、2つの社殿が切妻造の渡殿で繋がれて、3殿が縦一列に並んでおり、明治から大正期に建立されたものである。祭神は、天照皇大御神、萬幡豊秋津姫命、手力男命、豊受姫命、須佐之男命、市杵島姫命、五十猛命。



図2-4-18 能見神明宮の境内

### ③活動

#### ア.能見神明宮大祭

##### a.能見神明宮大祭の歴史

この祭りの起源について詳細は不明であるが、『諸用扣』(弘化3年(1846)～明治8年(1875))で存在を確認することができる。幕末には材木町東部の氏子を中心となって山車や花笠を作り、祭りに使うようになった。その後、明治25年(1892)の『神明社祭事録』によれば、その頃には祭りが現在に近い形で開催されていたことがわかる。祭りの重要な大行事は「御神輿渡御」と「山車の曳き廻し」である。「御神輿渡御」が大祭の静の象徴であるならば、「山車の曳き廻し」は動の象徴といえる。

明治の頃までは2層式、3層式であった山車は、電線が引かれるなどの道路事情により、現在の山車へ改造・新造されたものの、いずれも趣がある。山車の曳き廻しも、戦争の拡大

により、昭和11年(1936)にいったん休止されたが、昭和27年(1952)に再開した。各町独特の昔から伝わる「お囃子<sup>はやし</sup>」を大人から子供へと、代々伝えて行くのも良き風習となっている。現在も「神明さん」の愛称で親しまれている。

### b.現在の能見神明宮大祭

現在は5月第2日曜日及びその前日、翌日に行われる。江戸時代後期からほとんど変わることなく現代に引き継がれてきている「御神輿渡御」は、神明宮の御神体を神輿に移して氏子町を巡る祭礼の重要な神事である。境内には花笠梵天が参道の両脇に立てられ、東西には芝居の舞台と山車がずらりと並ぶ。先獅子と呼ばれる金色の獅子を先頭に進む数百メートルの行列は、まさに平安絵巻と呼ぶにふさわしいもので、各町に設けられた御旅所<sup>おたびしょ</sup><sup>8</sup>では町の安全と繁栄を祈願して御祓いが行われる。

現在、神明宮の氏子には8台の山車があり、各町の特徴を表した法被<sup>はっぴ</sup>やゆかた姿も勇ましい大人や子供の手によって、各町独自のお囃子を奏でながら、江戸時代に重要な街道筋であった足助街道を始め、氏子町内を曳き廻される。明治頃までは2・3階建てであったが、道路事情や電灯、電話の引き込み線等のため、現在では平屋建ての形に改造されている。町の辻々で止められた山車の前面からは舞台が引き出され、管弦・太鼓に合わせて子供たちの手踊りが披露される。氏子の家の女兒が踊り子となり、身内の人は山車について回って「花」と呼ばれる御祝儀を入れた包み紙を投げる。お囃子や踊りで彩られた山車曳きで、祭りの雰囲気は一層華やいだものとなる。夕方には各山車が神明橋に集まり、いよいよ祭りのクライマックス「山車宮入り」が始まる。午後7時を過ぎた頃、全ての



図2-4-19 能見神明宮の御神輿渡御



図2-4-20 御旅所



図2-4-21 能見神明宮の山車の曳き廻し

<sup>8</sup> 御神輿車が留まる場所のことを指し、町内に神が立ち寄る場といえる。木垣（井桁とも）と呼ばれる木製の枠の中に清砂を盛り、四方を忌竹と注連縄で囲った形をしており、各町が用意し、神聖な場所として清砂をまたぐことは禁止されている。

山車の提灯を一斉に点灯し、高張提灯を先頭に動き始める。

そして、およそ2時間をかけて、氏子各町をお囃子の音を響かせながら廻り神明宮に向かう。境内に集結した後、8台の山車の舞台では奉納の舞が華やかに行われる。このとき、祭りは最高潮に達する。山車の練り歩きは、松本、元能見中、元能見南、城北・元能見北、能見北、能見中、能見南、材木二丁目の順番で、毎年1町ずつ繰り上げて行われる。前日祭の夜、神社境内において手筒花火が奉納される。打ち上げ後の花火の筒は縁起ものとされ、火災除けとして玄関等に飾られる。令和7年(2025)に市指定無形民俗文化財に指定された。



図2-4-22 能見神明宮の奉納の舞

#### ④まとめ

市街地の多くで、狭あいな道路など江戸時代の町割りが感じられ、特に松本町周辺は、永禄3年(1560)創建の家康公の父・松平広忠の菩提寺・松<sup>しょうおうじ</sup>應寺があり、江戸時代にはその門前町として、また大正から昭和40年代までは花街としても栄えた場所で、空襲により町の8割が焼失したものの、松應寺周辺の随所にその面影が残されている。祭りの時期には、岡崎城下の風情と伝統が感じられる場へと舞台転換するのである。

こうした昔ながらの祭礼風景を今に残す祭りは貴重であり、巡行する町筋の歴史性と相まって、往時の風情を偲ぶことができるとともに、中心市街地における岡崎の町人文化の伝統が感じられる。



図2-4-23 能見神明宮境内に集結した山車

表2-4-2 能見神明宮の山車

町	概要	山車
松本町	建造時期:昭和 35 年(1960)。各所に「矢作橋行列図」や「天の岩戸図」等(江坂兵衛)の彫刻。平成 14 年(2002)、二世前前の山車に飾られていた彫刻「陰陽の龍」が復活。前面から引き出された舞台の上で手踊りを披露。	
元能見中町	建造時期:昭和 28 年(1953)(花車)。昭和 32 年(1957)改造。正面に「牡丹」の彫刻。左右の「神文五三の桐」を透かし彫りにし、牡丹の花・藤の花の友禅夢樹の行灯仕立。友禅夢樹(久恒俊治)の行灯は全国伝統的の工芸品入選。舞台を引出し、手踊り披露。	
元能見南町	建造時期:昭和 33 年(1958)。総白木造りで一本の釘も使われていない。天井の真中に「龍」の彫刻。外側の前面と側面にも「龍」の彫刻を配置。引き出した舞台の上で子供たち(小学生以下)が踊りを披露。	
城北町 元能見北町	建造時期:不明。昭和 31 年(1956)材木町から譲り受けた。山車前面は彩色箔押しされた彫刻で装飾。明治頃までは2・3階建てであったが、道路事情や電灯、電話の引込線等のため現在の形に改造された。	
能見北之切	建造時期:江戸後期に建造された高層式山車を明治中期及び昭和 31 年(1956)に改造。壇箱上山笠形、中備等の彫刻は文政5年(1822)瀬川治助重定の作で主題は「雲水龍」、「波紋」、「唐獅子」、「雲鶴」等である。山車前面より舞台を引出し、子供たちによる踊りを披露。	
能見中之切	建造時期:昭和 28 年(1953)。彫刻「鳳凰」、「龍」(懸魚)、「蓮」、「鶴」(欄間)等。水引幕に赤地に能見中之切、腰幕に紺地に阿吽の獅子、見返り幕に赤地に能中。前面の引出し式の舞台で子供たちが日本舞踊を氏子町内で披露。	
能見南之切	建造時期:明治初期。各所に極彩色の彫刻。前面の柱には「昇龍下龍」の目にさらしが巻かれており、これを外すと祭礼に雨が降るといふ言い伝えがある。辰年に巻き変えられる。山車から簡易舞台を引出し、踊子連が3曲ほど披露。	
材木二丁目	建造時期:大正4年(1915)。黒・赤の漆塗り。彫刻「獅子」、「龍」、「象」、「仁王像」、「狛犬」等。天井には昇り龍を中心に彩色された四季の花鳥がとり巻く天井絵が描かれている。山車の前面から引き出された舞台の上で手踊りを披露。	

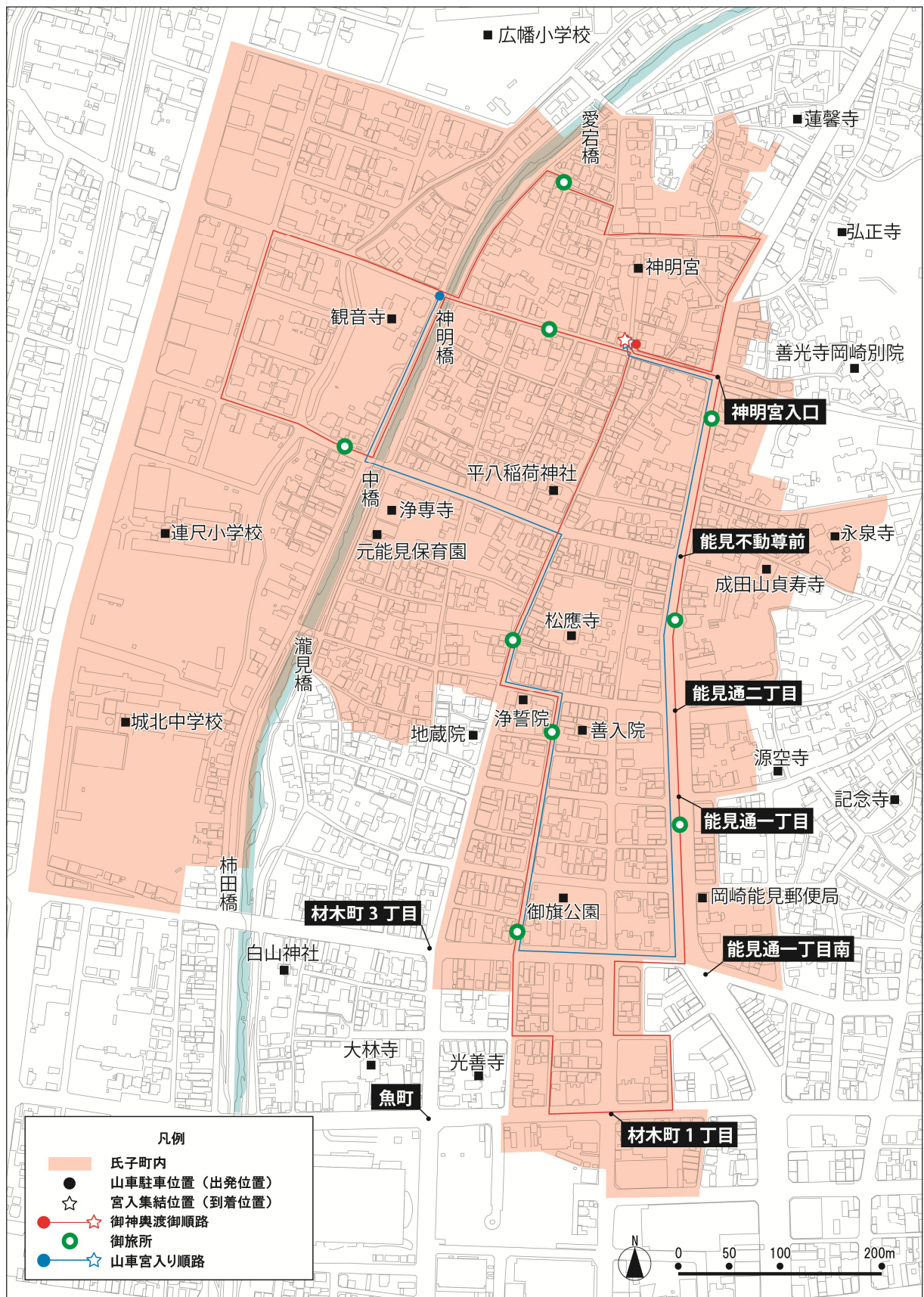


図2-4-24 能見神明宮の御神輿渡御及び山車宮入り図(令和7年(2025))



## (6)おわりに

現在では町名変更がなされ、旧来の町名は通称となっているが、自治会組織やその運営、そして祭礼において旧町名のまともりは存続している。お囃子の練習等を通して、町内の人間関係が築きあげられるなど、祭礼形態や運営のあり方はその町の性格と密接に結びついており、祭礼の変容は町の展開の一つの表れでもあるが、祭礼は大人から子供たちへと伝えられ、伝統文化を継承していく重要な場となっている。

このように、神輿を担ぎ、山車を曳き回す氏子の勇壮な姿や奏でられるお囃子の笛等の音色は、江戸時代から連綿と行われてきた祭りの華やかさや、歴史や伝統を反映した人々の心意気を今に伝えるものであり、旧岡崎城下の市街地を舞台に受け継がれてきたこれらの祭礼は、良好な景観を形成し、岡崎城下として栄えた往時の賑わいを彷彿とさせ、本市固有の歴史的風致を形成している。

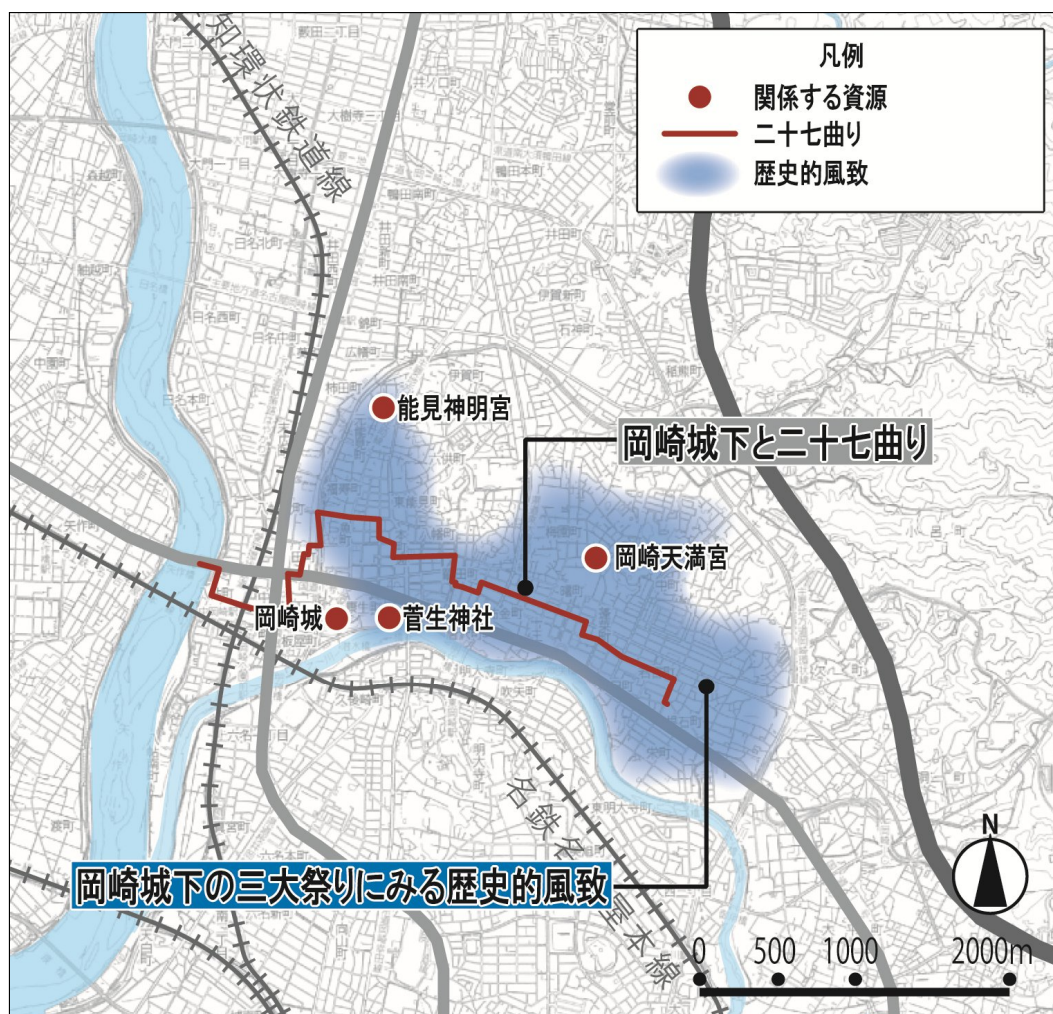


図2-4-26 岡崎城下の三大祭りにみる歴史的風致の範囲